

緑の地獄

「森を守る」という言葉を最近よく耳にする。しかしどうすれば森を守れるのだろうか。緑を大切にすることはどういうことなのか。肝心なことがさっぱりとみえてこない。言葉だけが独り歩きするから今度は何もかもが禁止で、草一本燃やすことさえできなくなる。挙句の果てには、寺や神社などの落ち葉焚きまでも条例で禁止してしまった市町村が多い。

言葉の独り歩きはどの国も同じらしい。オーストラリアでは先住民の伝統的野焼きを「山を焼くのは野蛮で無知な行為」とばかりに禁止した。ところがその後大規模な山火事がしょっちゅう起きて政府は慌てている。先住民のようにちょっとずつ焼いておくと、大きな火事にはならない。どっこい、先住民の知恵のほうが上だったというわけだ。

先ごろ西日本のある過疎地帯にすむ老人の話聞いた。過疎の激化で集落は廃絶寸前。先祖伝来の美田も一枚また一枚と休耕田になってゆく。サルやイノシシやシカなどの野生動物が庭先の畑の、わずかばかりの作物を食い尽くす。草刈が追いつかずあたりは草ぼうぼうになる。春には座敷の畳を破ってタケノコが生えてきた。このままでは集落全体が緑に飲み込まれてしまう。「ここらは緑の地獄やで」という言葉が耳に残った。

一方、都会の人びとは緑に癒されると思っている。暇をつくって森林浴でもしたいと思っている人は世代を問わず多いようだ。ところが市の中心部から二十キロもいかない京都市北部でもその過疎地と同じようなことがおきつつあることは、意外と知られていない。今のままゆけば、日本列島は、都会の砂漠と緑の地獄へと二極分化を起こしてしまう。

緑の地獄と化した里では農業はできない。これに呼応するかのように食料の輸入は増える一方だ。かつて「てんぷらうどんを食べても国産品は水とネギだけ」と嘆いたのは故蜷川虎三・元府知事だったと思うが、今やその水とネギさえ輸入されるありさまだ。この国は、耕せる土地は遊ばせておいて、何億という飢える人びとのいる国外から食料を買っている。なぜ？安いから。コンビニ弁当やファーストフードの値段が安いのはそのためだ。若者や女性に広がる、過熱したダイエット、健康ブームも問題だ。健康に問題がないのなら、なるべく加工していない、地で取れたものから栄養を摂るべきである。できることなら、旬の、新鮮なものから。

食料の輸入も一種のグローバリゼーションといえそうかもしれないが、グローバル化がいつもよいこととは限らない。BSE（牛海綿状脳症）や鳥インフルエンザなどの病気のグローバル化がどんどん進んでいる。手放しのグローバル礼賛はほどほどにしたほうがよい。最近輸入されるものの中にカブトムシも入っているらしい。未知のウイルスなどが一緒に入ってこないかが心配だ。このままでは日本の里は、ますます緑の地獄化し、荒廃の度を深めてゆくばかりである。

佐藤洋一郎、現代のことば（京都新聞 2005・8・25）